

総説

日本国内における死産を経験した母親を支えるケアに関する文献検討
西山ひかり¹⁾ 池内和代²⁾ 祖父江育子³⁾

高知大学総合人間自然科学研究科看護学専攻¹⁾ 高知大学教育研究部医療学系看護学部門²⁾
広島大学大学院医歯薬保健学研究院³⁾

A literature review on care to support the mothers who experienced
stillbirth in Japan

Hikari Nishiyama¹⁾ Kazuyo Ikeuchi²⁾ Ikuko Sobue³⁾

Kochi University Integrated Human Natural Sciences Nursing Department¹⁾

Kochi University Research and Education Faculty Medicine Unit , Medical Sciences Cluster²⁾

Hiroshima University Graduate School of Biomedical & Health Sciences³⁾

要 旨

「死産を経験した母親を支えるケア」の内容、ケアを行うことで導き出された結果を明らかにするために国内論文を用いて文献検討を行った。ケアの内容は、《母親が子どもの母親であることを気付けるように支える》《母親が自分の感情を知ることを支える》《母親の思いを支える》《母親が家族を含めた周囲との繋がりを気付けるように支える》であった。ケアを行うことで導き出された結果は、《子どもの母親として生活する》《家族の絆を再認識する》《亡くなった子どもを含んだ家族として再構築する》であった。文献検討の結果、「死産を経験した母親を支えるケア」は、母親が子どもの母親であること、自分の感情・思い、家族を含めた周囲との繋がりに気付くことを支えるケアであり、母親自らの気づきを通して前向きに歩むための一助となっていた。
キーワード：母親、死産、周産期死亡、ケア

Abstract

This study reviewed the contents of the care given to mothers who experienced a stillbirth and its effect in the Japanese literatures. The content included the support to: 《 help the mothers recognize that they are the parents of their children 》, 《 help the mothers understand their own feelings 》, 《 respect the feelings of the mothers of their own 》, 《 help the mothers realize they can receive support from the family members and surrounding people 》. The consequences were: 《 the mothers became able to live as the parents of the children 》, 《 the mothers became able to re-recognize the bonds of family 》, 《 Reconstruction of the family 》. The conclusions: The care helped mothers recognize that they were the parents of their children, understand their feelings, believe their own thoughts, and realize that they could receive support from their family members and surrounding people. The care was helpful for the mothers to positively live their lives by recognition of the mother.

Keyword: mother, stillbirth, perinatal loss, care

受付日：28年6月30日 受理日：28年9月29日

【緒 言】

健やか親子21（第二次）では、周産期死亡率は、平成24年で出産千対4.0、出生千対2.7、新生児死亡率1.0と世界最高水準を維持している¹⁾。しかし、世界最高水準の周産期医療においても周産期死亡率および新生児死亡率を“0”にすることは非常に困難であり、「赤ちゃんの死」がなくなることはない。

親にとって、誕生を待ち望み、共に過ごす未来を想像していた中で、子どもを亡くすことは、言葉には言い表せられないほどの悲しみと辛さを体験することである。先行論文では、「死産によってわが子を亡くすことは、わが子と過ごす未来の喪失、親としての発達課題の中断を余儀なくされる。また、親としての役割が十分に行えなかったことによる罪悪感や自責感が生じることや、子どもの存在・思い出を共有できる他者が少ないことから、その悲しみや苦しみを他者に表出しづらく、孤立していく場合がある」²⁾⁻⁵⁾と述べている。

欧米では、1970年代後半より、周産期に子どもを亡くした両親の体験を示す用語として、Perinatal loss が使用されるようになり、Perinatal loss の親へのケアに関する研究が行われている⁴⁾。日本においても、1990年代後半より子どもの“生”だけではなく、“死”に対しても注目されるようになり、死産を経験した母親に対するケアや研究が行われている⁶⁾。

そこで、本研究では、日本における「死産を経験した母親を支えるケア」に関する文献検討を行った。

【目 的】

日本における「死産を経験した母親を支えるケア」に関する文献検討を通して、「死産を経験した母親を支えるケア」について検討する。

【方 法】

1. データ収集方法

医学中央雑誌 Ver5、CiNii、最新看護牽引Webを用いて文献検索を行った。検索年は、1990年代後半から研究がなされるようになっていることから⁶⁾、1990年から2014年とした。検索したキーワードは、「妊娠12週以降の死産 and 母親 and (ケア or 看護 or グリーフケア or ビリーブメントケア)」で、総説、会議録を除いて実施し、66件を抽出した。研究タイトルと抄録から本研究の目的との関連性を検討し、死産を経験した母親を支えるケアについて記述している国内論文のうち研究対象が「死産を経験した母親」12件、「死産を経験した母親を支える看護師（助産師あるいは看護師）」10件を分析した。

2. 分析方法

分析は、各論文を精読し、論文全体の概要を把握し、母親が語った内容、助産師及び看護師が実際に行ったケアの内容から、死産を経験した母親を支えるケアの内容、死産を経験した母親を支えるケアを行うことにより導き出された結果に関する記述内容を抽出した。抽出した各記述をコード化し、コードの共通性と相違性を識別し、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行い、概念の主要なテーマを導いた。以下でカテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、コードを [] で表す。

表 1. 死産を経験した母親を支えるケアの内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	論 文
子どもの母親であることを気付けるように支える	母親が子どもと過ごす時間と環境を大切にす	子どもを抱く・沐浴する・授乳するなど	花輪 (1999), 森木 (1997), 金 (2001), 大塚 (2003), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 野口 (2005), 堀 (2005), 千秋 (2006), 磯村 (2007), 米田 (2007), 能町 (2009), 相澤 (2010), 荻原 (2010), 葛西 (2010), 岩瀬 (2012), 鈴木 (2012), 布宮 (2012), 小野 (2014)
		母親が子どもの火葬あるいは埋葬に立ち会えるように調整する	金 (2001), 飯沼 (2005), 堀 (2005), 千秋 (2006), 荻原 (2010)
	母親と共に子どもの生を尊重する	母親と共に子どもの思い出の品を遺す	花輪 (1999), 金 (2001), 大塚 (2003), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 野口 (2005), 堀 (2005), 千秋 (2006), 磯村 (2007), 米田 (2007), 能町 (2009), 荻原 (2010), 葛西 (2010), 岩瀬 (2012), 鈴木 (2012), 小野 (2014)
		子どもの儀礼の準備を母親と共にする	花輪 (1999), 金 (2001), 大塚 (2003), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 堀 (2005), 千秋 (2006), 米田 (2007), 荻原 (2010), 葛西 (2010), 岩瀬 (2012), 鈴木 (2012), 布宮 (2012)
	母親と子どもの関係を大切にす	母親と共に子どものことを話す	金 (2001), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 荻原 (2010), 岡永 (2014)
		母親の妊娠期からの子どもとの関わりを大切にす	岡永 (2005), 葛西 (2010), 布宮 (2012), 岡永 (2014)
母親が自分の感情を知ること支える	母親に現状及び事実を伝える	医師及び看護者が医学上の説明を行う	金 (2001), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 野口 (2005), 千秋 (2006), 葛西 (2010), 鈴木 (2012), 小野 (2014)
		グリーフワークについての説明を行う	堀 (2005), 能町 (2009), 岩瀬 (2012)
	母親が自分の感情に向き合いやすい環境を調整する	飯沼 (2005), 堀 (2005), 米田 (2008)	
	母親の感情をありのままに受け止める	母親の感情をありのままに受け止める	金 (2001), 岡永 (2005), 千秋 (2006), 相澤 (2010), 鈴木 (2012), 岡永 (2014)
母親と共にこれまでのことを振り返る		磯村 (2007), 荻原 (2010)	
母親の思いを支える	母親がこれで良かったと思えるように支える	母親の思いを傾聴する	花輪 (1999), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 堀 (2005), 磯村 (2007), 木地谷 (2007), 相澤 (2010), 荻原 (2010), 鈴木 (2012), 小野 (2014)
		母親の思いを尊重する	森木 (1997), 花輪 (1999), 飯沼 (2005), 岡永 (2005), 堀 (2005), 磯村 (2007), 木地谷 (2007), 相澤 (2010), 荻原 (2010), 鈴木 (2012), 岡永 (2014), 小野 (2014)
		母親の思いを看護者間で共有する	花輪 (1999), 米田 (2007)
母親が家族を含めた周囲との繋がりに気付けるように支える	母親と家族が思いを共有できるよう支える	家族の思いの表出を支える	森木 (1997), 花輪 (1999), 荻原 (2010), 葛西 (2010)
		家族に母親への支援方法について説明する	金 (2001), 藤村 (2004), 堀 (2005), 磯村 (2007), 木地谷 (2007), 米田 (2007), 谷 (2009), 葛西 (2010), 荻原 (2010)
		家族が母親に付き添えるよう環境調整を行う	岡永 (2005), 鈴木 (2012), 岩瀬 (2012)
		母親と家族が子どもとの思い出を共有できるように支える	花輪 (1999), 千秋 (2006), 磯村 (2007), 木地谷 (2007), 岩瀬 (2012), 鈴木 (2012), 小野 (2014)
	看護者が多職種と連携し、母親に継続した関わりをする	継続した関わりをする	花輪 (1999), 大塚 (2003), 岡永 (2005), 堀 (2005), 千秋 (2006), 米田 (2007), 能町 (2009), 葛西 (2010), 鈴木 (2012), 布宮 (2012), 小野 (2014)
		心理面の専門家を紹介する	飯沼 (2005), 堀 (2005), 磯村 (2007), 木地谷 (2007), 米田 (2007), 能町 (2009), 鈴木 (2012)
		ピアサポートグループを紹介する	木地谷 (2007), 飯沼 (2005), 米田 (2007), 能町 (2009), 鈴木 (2012)
		諸手続きに関する説明をする	花輪 (1999), 飯沼 (2005), 野口 (2005), 木地谷 (2007)

【結 果】

1. 死産を経験した母親を支えるケアの内容
(表1)

1) 《子どもの母親であることを気付けるように支える》

実際に行ったケアは、母親が[子どもを抱く、沐浴をする、授乳する]など〈子どもと過ごす時間と環境を大切にする〉や、[母親と共に子どもの思い出の品を遺す]、[子どもの儀礼の準備を母親と共にする]の〈母親と共に子どもの生を尊重する〉、[母親と共に子どものことを話す]、[母親の妊娠期からの子どもとの関わりを大切にする]の〈母親と子どもの関係を大切にする〉であった。《子どもの母親であることを気付けるように支える》は、母親が妊娠12週以降に胎内で亡くなった子どもの命も生きている子と同じ命として大切に思い、子どもが「生きて」、「生まれて」、「亡くなった」という母親自身が妊娠・出産を通して体験したことを大切にするケアであった。

2) 《母親が自分の感情を知ることを支える》

実際に行ったケアは、[医師及び看護師が医学上の説明を行う]、[グリーフケアについての説明を行う]の〈母親に現状及び事実を伝える〉、〈母親が自分の感情に向き合いやすい環境を調整する〉、[母親の感情をありのままに受け止める]など〈母親の感情をありのままに受け止める〉であった。《母親が自分の感情を知ることを支える》は、母親が自分自身の感情を否定することなくゆっくりと自分の感情と向き合い、自分自身の感情をありのままに受け止めることを支えるケアであった。

3) 《母親の思いを支える》

実際に行っていたケアは、[母親の思いを傾聴し、尊重する]、[母親の思いを看護師間で共有する]の〈母親がこれで良かったと思

えるように支える〉であった。《母親の思いを支える》は、母親が決定したことを支え、子どもに対して行ったことをこれで良かったと思えるように支えるケアであった。

4) 《母親が家族を含めた周囲との繋がりに気付けるように支える》

実際に行っていたケアは、[家族の思いの表出を支える]、[家族に母親への支援方法について説明する]など〈母親と家族が思いを共有できるように支える〉、[継続した関わりをする]、[ピアサポートグループを紹介する]など〈看護師が多職種と連携し、母親に継続した関わりをする〉であった。《母親が家族を含めた周囲との繋がりに気付けるように支える》は、母親だけではなく家族も思いを表出し、母親と家族が思い出を共有できるように支え、多職種と連携して継続的な関わりをするケアであった。

2. 死産を経験した母親を支えるケアを行うことにより導き出された結果(表2)

1) 《亡くなった子どもの母親として生活する》

母親は、[子どもの存在が生活の一部となる]など〈母親が亡くなった子どもと共に生活する〉、[他者との関わりを通して母親であることを実感する]の〈子どもの母親であることに気付く〉、[母親が自分の感情を他者に表出する]など〈母親が自分の感情を知る〉、[母親が子どもに対する思いを表出する]など〈母親が子どものことを思う〉、[気持ちを共有できる他者がいることに気付く]など〈母親が自分ひとりではないことに気付く〉という《亡くなった子どもの母親として生活する》ようになっていた。《亡くなった子どもの母親として生活する》は、母親が、亡くなった子どもの母親であること、ひとりではないことに気づき、自分自身の感情や思いを大切にしながら生活することであった。

表2. 死産を経験した母親を支えるケアによって導き出された結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	論 文
亡くなった子どもの母親として生活する	母親が亡くなった子どもと共に生活する	子どもの生に気付く	北濱 (2008), 小林 (2008)
		子どもの存在が生活の一部となる	北濱 (2008), 小野 (2014)
	子どもの母親であることに気付く	他者との関わりを通して母親であることを実感する	木地谷 (2007), 小野 (2014)
		母親が自分の感情を知る	花輪 (1999), 大塚 (2003), 北濱 (2008), 葛西 (2010), 崎山 (2011), 小野 (2014)
	母親が子どものことを思う	子どもが亡くなった悲しみに気付く	岡永 (2005), 崎山 (2011), 北濱 (2008), 江田 (2011), 小野 (2014)
		母親が子どもに対する思いを表出する	花輪 (1999), 大塚 (2003), 千秋 (2006), 北濱 (2008), 葛西 (2010), 萩原 (2010), 江田 (2011), 岩瀬 (2012), 小野 (2014)
		母親が子どもに対して十分なことができたと思う	大塚 (2003), 千秋 (2006), 北濱 (2008), 岩瀬 (2012), 小野 (2014)
	母親が自分ひとりではないことに気付く	子どもの死について考える	森本 (1997), 花輪 (1999)
		同じ境遇の他者がいることに気付く	花輪 (1999), 木地谷 (2007)
	家族の絆を再認識する		気持ちは共有できる他者がいることに気付く
家族が支えあう			花輪 (1999), 大塚 (2003), 崎山 (2011)
家族に感謝する			小野 (2014)
亡くなった子どもを含んだ家族として再構築する	子どもが家族の一員となる	家族の思いを知る	木地谷 (2007), 磯村 (2007), 江田 (2011), 小野 (2014)
		家族が子どものことを大切に思う	北濱 (2008), 小林 (2008), 小野 (2014)
		家族が子どもの生を尊重する	小野 (2014)

2) 《家族の絆を再認識する》

母親は、[家族が支え合う]、[家族の思いを知る]などという《家族の絆を再認識する》ようになっていた。《家族の絆を再認識する》は、母親が家族の思いを知り、家族が支え合っていることに気付くことであった。

3) 《亡くなった子どもを含んだ家族として再構築する》

母親は、[家族が子どもことを大切に思う]、[家族が子どもの生を尊重する]の〈子どもが家族の一員となる〉という《亡くなった子どもを含んだ家族として再構築する》ようになっていた。《亡くなった子どもを含んだ家族として再構築する》は、家族が、亡くなった子どもも家族の一員として大切に思うことであった。

【考 察】

文献検討の結果、「死産を経験した母親を支えるケア」のカテゴリーは、《子どもの母親であることを気付けるように支える》、《母親が自分の感情を知ることを支える》、《母親の思いを支える》、《母親が家族を含めた周囲との繋がりに気付けるように支える》が明らかになった。

この4つのカテゴリーが導き出された背景として、マタニティサイクルにある母親に対しての「女性・子ども・家族の生命と人権を尊重し、母親の持てる力、セルフケア能力を信じて、その力を引き出し、母親が自立・発達していけることを支えるケア」^{29) 30)}が根底にあったと考える。しかし、今回の文献検討を行った死産を経験した母親は、子どもを亡くしたことにより様々な思いや感情が揺れ動

き、混乱した状態にあり、育児を通して子どもの成長・発達や子どもとの相互作用を感じることができないことから、自分自身の持つ力、セルフケア能力、亡くなった子どもの母親であることに気付くことが困難な状態にあると考える。そのため、看護者は、様々な思いや感情が揺れ動き、混乱した状態の中から母親を助け出そうとすることではなく、母親自らの気付きを大切にすることを考えている。

そして、「死産を経験した母親を支えるケア」を行うことによって、死産により子どもを亡くした母親は、《家族の絆を再認識》し、《亡くなった子どもを含む家族として再構築する》ことで、《亡くなった子どもの母親として生活する》ようになっていたことが明らかとなった。

花井ら (2014) は、「何らかの健康問題をもつ家族が、体験を看護師に語り、気持ちを共有する/重ねることによって、自己への気付きや新たな視点を獲得、体験の意味を変容させていく」³¹⁾と述べている。今回「死産を経験した母親を支えるケア」の文献検討においても、看護者の母親に寄り添い、母親のありのままに受け止める「死産を経験した母親を支えるケア」により、母親は、妊娠期間中からの自らの体験を語り、感情や思いを表出することで、自分自身の思いや感情だけではなく家族の思いも知り、子どもの母親であること、亡くなった子どもも家族の一員であることなどの気付きがあったことが示された。この母親の気付きがあったからこそ、母親は、《家族の絆を再認識》し、《亡くなった子どもを含む家族として再構築する》ことで、《亡くなった子どもの母親として生活する》ようになっていたと考える。

すなわち、「死産を経験した母親を支えるケア」は、母親が子どもの母親であること、自分の感情・思い、家族を含めた周囲との繋

がりに気付くこと支えるケアであり、母親自らの気付きを通して母親が家族と共に前向きに歩むための一助となっていたことが明らかとなった。

【結 論】

日本における「死産を経験した母親を支えるケア」に関する文献検討により、「死産を経験した母親を支えるケア」は、《母親が子どもの母親であることを気付けるように支える》、《母親が自分の感情を知ることを支える》、《母親の思いを支える》、《母親が家族を含めた周囲との繋がりを気付けるように支える》の4カテゴリーで構成された。そして、「死産を経験した母親を支えるケア」を行うことにより母親は、《家族の絆を再認識》し、《亡くなった子どもを含んだ家族として再構築する》ことで《子どもの母親として生活する》ようになっていた。文献検討の結果、「死産を経験した母親を支えるケア」は、母親が子どもの母親であること、自分の感情・思い、家族を含めた周囲との繋がりに気付くこと支えるケアであり、母親自らの気付きを通して母親が家族と共に前向きに歩むための一助となっていたことが明らかとなった。

【文 献】

- 1) 健やか親子21 (第2次). 基盤課題 A 切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策. 6. 1. 2016.
http://rhino3.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka2/mokuhyou_A.html
- 2) 橋本洋子: NICU と心のケア. 46-53, 124-128. メディカ出版, 2000.
- 3) 大井けい子: 母親の悲嘆過程、ペリネイタルケア. 22(3). 22-25. 2003.

- 4) 岡永真由美、横尾京子、中込さと子：Prenatal loss（ペリネイタル・ロス）の概念分析．日本助産学会誌、23(2)．164-170．2009.
- 5) 山中美智子：赤ちゃんを亡くした女性への看護、メディカ出版．1．2009.
- 6) 太田尚子：死産で子どもをなくした母親たちの視点から見たケア・ニーズ．日本助産学会誌．20(1)．16-25．2006.
- 7) 森本真理子：死産の出産を経験した産婦の看護、年報／兵庫県立尼崎病院〈編〉．9．57-58．1997
- 8) 花輪ゆみ子、市川裕子、佐野美樹他：子宮内胎児死亡をした母親の悲嘆家庭とその援助．第30回日本看護学会論文集母性看護．3-5．1999
- 9) 金美江、藤谷智子、浅井有紀 他：死産に立ち会う助産婦の心理過程とその役割- ピリブメントケアコーディネーターの役割-．ペリネイタルケア．20(1)．98-103．2001.
- 10) 大塚香里、福力純子：誕生死を経験した母親の言動分析- 流産・死産のケアを考える-．第34回日本看護学会論文集母性看護．124-126．2003.
- 11) 飯沼里美、杉村久美、村こずえ他：死産となった家族への援助に関する1考察．岐阜県母性衛生学会雑誌．33．13-19．2005.
- 12) 岡永真由美：流産・死産・新生児死亡に関わる助産師によるケアの現状．日本助産学会誌．19(2)．49-58．2005.
- 13) 野口絵美、加納尚美：死産を経験した産婦をケアする助産師の心理．茨城県母性衛生学会誌．25．35-42．2005
- 14) 堀美幸、溝口泰子、三輪峰子：児を亡くした母親への継続看護- フィンクの危機モデルと家族ストレス論マッカバンの二重ABC-X モデルを用いて-．岐阜県母性衛生学会雑誌．33．49-54．2005.
- 15) 千秋清美、磯村ゆき子、黒川洋子：妊娠19週での流産を体験した母親との関わりを通して死産ケアを考える．第37回日本看護学会論文集母性看護．149-151．2006.
- 16) 磯村ゆき子、黒川洋子：死産を経験した母親が必要としているケア- 死産ケアマニュアルに沿った看護を实践して-．第38回日本看護学会論文集母性看護．89-91．2007.
- 17) 木地谷祐子、蛸崎奈津子、石井トク：死産．早期新生児を体験した母親の語りからみる助産師の役割．第38回日本看護学会論文集母性看護．92-94．2007.
- 18) 米田昌代：周産期の死の「望ましいケア」の実態及びケアに対する看護者の主観的評価とその関連要因．日本助産学会誌．21(2)．46-57．2007
- 19) 北濱まさみ、船本由美子、坂井恵子：死産体験後にグリーフケアを受けた母親の一年間の心理過程．第39回日本看護学会論文集母性看護．3-5．2008.
- 20) 能町しのぶ、村井文江、江守陽子：妊娠12週以降の死産を経験した母親への分娩施設における看護支援．茨城県母性衛生学会誌．27巻．1-7．2009.
- 21) 相澤優紀：児を失った産婦への精神的看護．事例研究集録／川崎市立川崎病院看護部看護教育委員会〈編〉．1-3．2010.
- 22) 葛西かおり、梅田めぐみ、木澤麻衣子他：胎児を突然亡くした母親の悲嘆過程の行動分析- グリーフケアを考える-．函館五稜郭病院医誌．18．27-30．2010
- 23) 萩原加佳子、東かずみ、眞方香奈 他：死産を経験した母親の語りを引き出した看護場面の分析．鹿児島県母性衛生学会．15．19-24．2010.
- 24) 岩瀬和代：周産期におけるグリーフケアの実態と今後の課題．静岡県母性衛生学会学術誌．8．13-20．2012.
- 25) 鈴木静恵、八木かおり、塚本美加：流産・

- 死産・早期新生児死亡をされた児をもつ家族に対するケアの実際と今後の課題. 聖隷浜松病院医学雑誌. 12(1). 49-52. 2012.
- 26) 布宮玲子: 周産期の死における母親へのグリーフケア場面で看護者が体験する「癒し」の感情. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録. 37. 234-241. 2012.
- 27) 岡永真由美、岡村仁: 助産師の役割の周産期の喪失ケア体験に基づいた卒後教育プログラムにおけるニーズの検討. 母性衛生. 54(4). 556-562. 2014.
- 28) 小野恵子. 藤田佐有理. 原田好美他: ペリネイタル・ロスを体験した母親へのグリーフケアの検討～グリーフケアマニュアルに沿った看護を実践して～. 国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌. 24-28. 2014.
- 29) 森恵美他: 母性看護学概論. 医学書院. 第12版第3刷. 34-39. 2014.
- 30) 横尾京子、中込さと子他: ナーシング・グラフィカ母性看護学①母性看護実践の基本. メディカ出版. 第3版第1刷. 16-19. 2013.
- 31) 花井文、堀妙子、奈良間美保: 家族や医療者が経験の語りをとおして感覚を共有する取り組み. へるす出版. 37(8). 941-947. 2014.